

桜図書館 5月展示解説シート兼ブックリスト
(展示期間 平成29年5月2日～5月28日)

茶の湯

～資料から紐解く歴史と茶人たち～



0 はじめに

2017 年 5 月に、東京都内では茶の湯に関連した注目すべき展覧会が開催されています。特に東京国立博物館で開催される「茶の湯」展は、国宝、重要文化財に指定された茶器が多数展示され、まさに開催されること自体が「奇跡」といえる展覧会です。

そこで、今回のテーマを「茶の湯」としました。とはいっても図書館ですから、茶器を展示することはできません。そこで、図書館ならではの視点として、茶の湯の歴史を語るうえで外すことのできない茶人に焦点を当て、その人物や時代に関連する資料を紹介していくこととしました。美術館や博物館とは一味違った、図書館ならではの茶の湯の展示をお楽しみくだされば幸いです。

※ 5 月に行われる主な茶の湯の展覧会を紹介します。「茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術」のみ、5 月 21 日に終了しますのでご注意ください。

・「茶の湯」：東京国立博物館

唐物を展示しながら茶を楽しんだ足利将軍時代から実業家茶人が活躍した近代までの茶の湯で使用された名器を紹介する展覧会です。約 260 の展示作品のうちの 3 分の 1 が国宝、重要文化財であり、茶の湯愛好者必見の展覧会といえます。ただ、「ムキ栗」や「卯花塙」など通期で見られるものもありますが、全体的に展示替えが多いため、特に見たいものがある場合は事前に出品リストを確認したほうが良いでしょう。

・「茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術」：国立近代美術館 5 月 21 日まで

千家十職の一つ、樂家 15 代 450 年にわたるにわたる茶碗を一堂に集めた展覧会です。初代長次郎作の「大黒」、「無一物」、「太郎坊」、三代道入作の「鶴」、本阿弥光悦作の「乙御前」をはじめとした名品が一堂に会した本展覧会は、当代吉左衛門をして「私が生きている間に二度とこれほどの規模の展覧会は開催できない」と言わしめたほどです。展覧会終盤の、当代吉左衛門の作品が並ぶ展示も圧巻です。

・「茶の湯のうつわー和漢の世界」：出光美術館

出光美術館が所有しているコレクションのうち、特に、江戸時代に流行した茶の湯の器に焦点を当てた展覧会です。樂、萩、唐津、遠州七窯に始まり、鮮やかな京焼、唐物の器という風に、江戸時代の中でも生じた趣向の変化に即した展示をしているのが特徴です。13 年ぶりに公開される『雲州蔵帳』も見どころの一つです。

・「茶の湯の名品ー破格の美・即翁の眼」：畠山記念館

荏原製作所の畠山一清が収集した美術品を保存、管理している畠山記念館。その中でも茶道具を中心に展示しているのが今回の展覧会です。上記展覧会に比べると小規模ですが、初代長次郎作の赤楽茶碗「早船」や重要文化財の伊賀水指「からたち」など、貴重な名品に会うことができます。

1 茶の湯の黎明期

お茶の木の原産はインド、中国あたりとされており、このお茶の葉を加工して飲む風習も、紀元前後頃から四川省において始まったと考えられています。流行したと考えられるのは唐代の頃で、760年頃に、最初の茶書と言われる『茶経』が陸羽によって記されました。日本には、この時代に遣唐使を通じて伝わったと考えられています。新しい唐の文化ということで嵯峨天皇を始めとした宮廷貴族、僧侶の間で一時的に流行しましたが、その後流行は退潮しました。なお、この頃のお茶は団茶法¹と呼ばれるものでしたが、現在知られている抹茶法へと変わったのは宋の時代、日本に伝えたのは栄西です。その後、鎌倉時代後期から室町時代にかけて、喫茶文化とともに茶の栽培も広がっていき、中でも禅宗寺院においては、僧侶の従うべき規範として喫茶儀礼が定められるに至り、さらにそこから民間での茶会へと派生していきました。更に闘茶²、唐物荘厳³などを行う茶会も催され、特に唐物荘厳については座敷飾りの規矩が定められ、そこから出現した書院座敷及びその場にふさわしい茶礼として、将軍が足利義教の頃に「書院茶の湯」が生まれました。現代の物とは異なる部分も多いながら、現代に通じる茶の湯の原型がこうして誕生したのです。

<主要資料リスト>

題名	著者	出版社	出版年
『喫茶養生記』 (講談社学術文庫)	栄西／[著] 古田紹欽／全訳注	講談社	2000
『禅入門 1 栄西』		講談社	1994
『中国の茶書』	布目潮風／編訳 中村喬／編訳	平凡社	1976
※陸羽『茶経』のほか、中国の茶書を収録しています。			
『永平清規 赴粥飯法提唱』	西嶋和夫／著	金沢文庫	1992
※『永平清規』は曹洞宗の開祖である道元の著書で、曹洞宗寺院における生活規律や理想を記したものです。6編2冊で構成されており、喫茶儀礼を定めた書の一つと考えられています。「赴粥飯法」はその中で、特に食事の作法について述べた部分です。お茶を頂く場合にも、食事の時と同様の作法で坐禅堂に出入りし、また坐禅床に上がり、下りるよう記されています。			

¹ 団茶法：茶葉を蒸して茶臼でついたかたまり（団茶）を削って粉末とし、それを、湯を沸かした釜にかき混ぜながら入れ、掬って飲む方法の事。

² 闘茶：異なった茶の味別をすること。梅尾高山寺産の「本茶」と他所産の「非茶」を区別する本非茶勝負がよく知られています。

³ 唐物荘厳：唐物と呼ばれる中国産のものを部屋に飾ること。

2 村田珠光、武野紹鷗、千利休 ～侘茶の大成～

室町時代に誕生した「書院茶の湯」は、唐物が中心でしたが、そこに一石を投じる人物がいました。村田珠光です。珠光は弟子の古市播磨にあてた文章『心の文』において、「此道の一大事ハ和漢之さかいをまきらかす事、肝要肝要」と述べ、茶の湯の道で大切なことは、「和」と「漢」の境を融和させる、つまり、和物と唐物が渾然一体となった境地をつくるのが大切であると説いたのです。また、これと呼応するように茶の湯を行う場所についても、山里の草庵を思わせる四畳半を志向する動きが現れ、こうして出現した「草庵の茶の湯」が、現在まで続く茶道の基本となりました。そのことから、村田珠光は「侘び茶の祖」と呼ばれています。

この侘び茶をさらに洗練させたのが武野紹鷗です。もともとは歌道を志向していた紹鷗ですが、茶の湯にも興味を持ち、村田珠光の門人、村田宗珠に入門、堺にある南宗寺の禅僧大林宗套に参禅し、茶の湯に開眼すると同時に茶禅一味の侘び茶を深めると同時に、茶の湯に和歌の思想を取り入れ、これまで唐物主体だった茶の湯を一気に和風化していき、それと同時に侘び茶は、特に堺を中心にさらなる発展を遂げます。

こうした流れから茶道を大成させたのが千利休です。堺に生まれた利休は武野紹鷗に珠光流の侘び茶を、大林宗套に禅を学び、やがて織田信長に茶頭として召し抱えられます。信長亡き後は豊臣秀吉の下で茶会の後見を務めるなどして信任を得ます。そんな利休は茶の湯の草体化を推し進め、二畳の茶室を作ったほか、「室床」や「躰口」といった、現在の茶室の基本となる要素を付け加えました。また、道具においても、竹中節茶杓や竹の花入、竹蓋置といった控え目なものが定着し、道具の鑑賞を中心としたこれまでの茶会から、主客に一体感を生ずるほど充実した茶会を目指す「一座建立」が重視されるものへと変化していくのです。

<主要資料リスト>

題名	著者	出版社	出版年
『茶の湯の祖、珠光』	矢部良明／著	角川書店	2004
『武野紹鷗研究』	戸田勝久／著	中央公論美術出版	1981
『千利休と村田珠光』	王丸勇／著	近代文芸社	1986
『千利休』	村井康彦／[著]	講談社	2004
『利休入門』（とんぼの本）	木村宗慎／著	新潮社	2010
『南方録』	[立花宗有]／[著] 西山松之助／校注	岩波書店	1995
『すらすら読める南方録』	筒井絃一／著	講談社	2003
※南方録は、千利休の高弟で堺の南宗寺の僧である南坊宗啓が、利休から授かった教えを書きとどめたものとされています。福岡藩家老立花実山がその発見者とされていますが、立花による偽書ではないかという説もあります。			

3 古田織部、小堀遠州 ～「へうげもの」から「綺麗さび」へ～

千利休によって大成された茶道ですが、その後も様々な変化を遂げていきます。第一の変化をもたらしたのが古田織部（重然）です。織部は約 10 年間利休に師事したと考えられ、1599 年頃には「茶の湯の名人」として知られるようになり、1610 年には徳川秀忠に茶法を伝授したといわれています。織部は、茶の湯の形式として、将軍を頂点とする武家社会にふさわしい「数寄屋御成」⁴を確立させ、茶室も、積極的に光を取り込むものとししました。茶器も斬新なデザインなものを採用し、1599 年に伏見の凝碧亭で行われた茶会で使用された瀬戸の茶碗は、博多の豪商・神谷宗湛に「へウケモノ（彫げ者）也」と言わせるほどでした。この頃から発展し、美濃で多く焼かれるようになったのが、織部デザインと伝わる「織部焼」です。こうして、織部は、禅に基づいた利休の茶の湯を、芸術性あふれる物へと変貌させたのです。

織部の茶の湯を今一度、時代に即したものに变えたのが小堀遠州です。行政官から後に伏見奉行に抜擢、大阪城天守閣などの作事奉行もこなしながら秀忠、家光の茶道指南役も務めた遠州は、戦乱が終わり、平和が訪れ王朝文化における古典的な美が求められた当時の美意識に沿った茶の湯を確立していきます。利休、織部の茶の湯の精神は受け継ぎながらも、白い高麗茶碗、明るく総合的なしつらえに徹した遠州の茶は、「綺麗さび」と呼ばれています。また、大名、武士の中に茶の湯の愛好者が増え、茶道具への需要が増えてくると、独自の美意識に基づいて優れた道具、いわゆる「中興名物」⁵を発掘し、また、それらの茶道具に、和歌からとった銘を付けることで文学性をもたせ、茶の湯を総合芸術の領域へ発展させたのです。また、遠州は、求められれば誰にでも茶の湯の指南をしたと伝わります。こうして、遠州の茶の湯は大名、武士の嗜みとして広まり、遠州流茶道として現在まで受け継がれているのです。

<主要資料リスト>

題名	著者	出版社	出版年
『へうげもの古田織部伝』	桑田忠親／著 矢部誠一郎／監修	ダイヤモンド社	2010
『古田織部 美の革命を起こした 武家茶人』	諏訪勝則／著	中央公論新社	2016

⁴ 数寄屋御成：通常、将軍は訪問先の正門から入りますが、そうではなく、数寄屋門から直接茶室に入り、饗応が終わると茶室から再び数寄屋門経由で帰途につく方式です。いわゆるお忍び形式をとることができるので大勢の家臣を同行する必要がないという点で優れていると考えられます。

⁵ 中興名物：小堀遠州の美意識によって選ばれた名品のことですが、この名称が使われたのは、松平不昧著の『古今名物類聚』においてです。なお、同書においては、千利休の時代の名品を「名物」。利休以前に足利義政を中心とする東山時の名品を大名物と分類しています。

『古田織部 桃山文化を演出する』	矢部良明／著	角川書店	1999
『小堀遠州 「綺麗さび」のころ』		平凡社	2009
『小堀遠州綺麗さびの極み』	小堀宗実／ほか著	新潮社	2006
『茶道聚錦 4 織部、遠州、宗旦』		小学館	1983

4 千宗旦、片桐石州 ～脈々と受け継がれる流派の起源～

小堀遠州の「綺麗さび」の茶の湯が時代の先端を行くなか、あくまで利休の築いた「侘び茶」を徹底、普及しようとした人物がいました。利休の孫である千宗旦です。宗旦は利休の死後散逸していた茶道具を整理し、利休好みの確認をしました。また、自分好みの茶道具を当時の有能な技術者たちに作らせ、自分の子どもたちをそれぞれ高松松平家、紀州徳川家、加賀前田家に仕官させました。こうして利休の道具が現在まで現存し、技能者集団は「千家十職」⁶として、三人の子どもたちは「三千家」⁷として現在まで脈々と受け継がれる流派の起源となったのです。

その宗旦から少し時代を下ると、もう一人、忘れてはならない人物がでてきます。片桐石州です。片桐且元の甥にあたり、大和小泉藩主を務めた人物です。郡奉行や普請奉行を務めたこともありましたが、千利休の長男である千道安の流れをくむ茶人でもありました。石州の茶の湯は、利休が施行した侘び茶の精神を基本としながらも、大名や貴賓向けに受け入れられ易い工夫を凝らしました。それを細かく規定したのが「石州三百箇条」で、これが高く評価され、三代将軍家光の茶道師範であった小堀遠州の後を継いで四代将軍家綱の茶道師範となりました。このことから、石州の茶の湯は将軍家から各大名、そして武士全般へと広がっていき、これが現在まで続く石州流茶道の起源となったのです。

<主要資料リスト>

題名	著者	出版社	出版年
『千宗旦 千家三世・わび茶の真髄』		淡交社	1999
『現代語訳宗旦文書』	田中稔／編	慧文社	2004
『裏千家今日庵歴代 第3巻 元伯宗旦』	千宗室(16代目)／監修	淡交社	2008

⁶ 千家十職：千家好みの茶道具を製作する、以下の十家のことです。なお、「千家十職」という呼称は大正時代から使用されるようになったもので、宗旦の時代から呼ばれていたわけではありません。

奥村家（表具師）、黒田家（竹細工・柄杓師）、土田家（袋師）、永樂家（土風炉・焼物師）、樂家（茶碗師）、大西家（釜師）、飛来家（一閑張細工師）、中村家（塗師）、中川家（金もの師）、駒澤家（指物師）

⁷ 三千家：三男・江岑宗左からはじまる表千家（不審菴）、四男・仙叟宗室からはじまる裏千家（今日庵）、次男・一翁宗守からはじまる武者小路千家（官休庵）の総称です。

『片桐石州の茶』	講談社／編	講談社	1987
『片桐石州の生涯』	町田宗心／著	光村推古書院	2005
『石州流 歴史と系譜』	野村瑞典／著	光村推古書院	1984

5 近現代の茶人たち ～大名から実業家まで～

流派の誕生と共に家元制度も確立されていくと、茶の湯はこれまでの創意工夫から伝統の継承へと主眼が移っていきました。かといって創成の流れが絶えるわけではなく、見直しや原点回帰といった動きは引き続き存在しました。これまでの伝統を重んじながらも、独自の茶風を生み出そうとする茶人もいましたし、新たな流派も引き続き誕生しました。江戸時代から明治時代に変わり、茶の湯の担い手だった大名や武家の消滅とともに茶の湯が衰退した時期もありましたが、「近代数寄者」と呼ばれる実業家茶人が誕生し、茶の湯の新たな担い手となりました。こうして、継承、見直し、新たな解釈を重ねながら、茶の湯は今なお受け継がれているのです。

ここでは、近現代に活躍した茶人に関する本を紹介します。

<主要資料リスト及び補足>

題名	著者	出版社	出版年
『大名茶人松平不昧展』	島根県立美術館／編集	日本放送出版協会	2001
※松平治郷（不昧）は松江藩主時代に藩政改革を行い、藩の財政立て直しに成功した人物。一方で石州流の茶の湯にも精通し、後に不昧流を確立しました。収集した茶道具は『雲州蔵帳』に伝わります。名物茶器を格付けした『古今名物類聚』は、茶の湯の歴史における大きな功績と言われています。			
『井伊直弼の茶の湯』	熊倉功夫／編	国書刊行会	2007
『茶湯一会集・閑夜茶話』	井伊直弼／著 戸田勝久／校注	岩波書店	2010
※井伊直弼というと、安政の大獄時の大老としてご存知の方が多いと思いますが、茶人としての顔も持っています。十四男として生まれ、「埋木舎」での不遇の時代に石州流茶道を学ぶと同時に過去の茶書を集め、研究し、その結果として記した『茶湯一会集』は、彼の茶の湯の集大成と言える著作です。また、多くの茶道具を製作したことも知られています。			
『耳庵松永安左エ門 上・下巻』	白崎秀雄／著	新潮社	1990
※松永安左エ門（耳庵）は、福博電気軌道の設立に関わり、戦後の九電力体制実現に携わったことから「電力王」や「電力の鬼」ともいわれています。60歳から茶書を紐解きつつ自己流の自由な茶の湯を実践しました。晩年を小田原で過ごしたことから「小田原三茶人」 ⁸ の一人に数えられていますが、戦時中に所沢の柳瀬山荘で茶三昧の生活を送った			

⁸小田原三茶人：益田鈍翁、野崎幻庵、松永耳庵の3名のことで、それぞれ茶室「掃雲台」、「葉雨庵」、「老櫟荘」を作りました。「葉雨庵」、「老櫟荘」については、小田原市内

ほか、墓が新座の平林寺にあるなど、実は埼玉とも浅からぬ縁がある人物です。			
『鈍翁・益田孝 上・下巻』	白崎秀雄／著	中央公論社	1998
※益田孝（鈍翁）は三井物産創業者であり、三井財閥を育成した実業家。引退後鈍翁と称し、茶器、骨董品収集のほか表千家不白流の茶道を学んでいます。彼が1895年に開いた大茶会は、今も「大師会」として毎年4月21日に行われています。西の大茶会と言われる「光悦会」の会長を務めたこともあり、多くの実業家茶人に影響を与えたことから、「千利休以来の大茶人」ともいわれています。			
『原三溪 偉大な茶人の知られざる真相』	齋藤清／著	淡交社	2014
※原富太郎（三溪）は、横浜に拠点を置いた絹の貿易商。一方で絵画・古建築の収集に余念がなく、また、芸術家のパトロンとして芸術家の育成に尽力しました。茶人としても知られ、「大師会」の重鎮として活躍し、「近代三茶人」 ⁹ の一人に数えられています。元邸宅と移築した古建築は、横浜市にある「三溪園」で一般公開されています。			
『逸翁自叙伝』	小林一三／著	図書出版社	1990
『新茶道』	小林一三／著	講談社	1986
※小林一三（逸翁）は阪急東宝グループの創業者で、鉄道を起点とした都市開発を行う、私鉄経営モデルの原型を生み出した人物です。茶人としても知られ、表千家の茶道を学びながらも、時代に即した茶の湯の道を模索し、その集大成として78歳の時に出版したのが『新茶道』です。			
『懐石と懐石道具 畠山即翁の茶事風流』	畠山記念館／編	畠山記念館	1994
※畠山一清（即翁）は、東京帝大時代の恩師、井口在屋教授が発明した渦巻きポンプ（のくちポンプ）を事業化し、荏原製作所を創立した人物です。茶人としても知られており、収集した茶道具は、現在畠山記念館にて管理、保存されています。			

※近代に行われた茶会を紹介した資料には以下のものがあります。

題名	著者	出版社	出版年
『大正茶道記 1～3』	高橋箒庵／著 熊倉功夫／校注 原田茂弘／校注	淡交社	1991
『近代数寄者の名茶会三十選』	熊倉功夫／編	淡交社	2004

6 茶室、茶道具を知る ～茶の湯の空間を彩る道具たち～

ここまでは人物を中心として茶の湯の歴史を簡単にたどってきましたが、時を同じくして、茶室、茶道具も様々な変化を遂げてきました。初期は唐物がもてはやされ、侘び茶の流れができたところから和物の茶碗へ趣向は移っていきました。その後不安定な時代を背景に流行った織部の「へうげもの」から、戦乱が終わった安定期には遠州の「綺麗さび」へと茶道具に対する趣向は変化していきました。その後も変化は続き、京都では野々村仁清をはじ

の松永記念館にて見学が可能です。

⁹ 近代三茶人：益田鈍翁、松永耳庵、原三溪の3名のこと。

めとする美しい京焼が、そして地方に目を転ずると「一楽二萩三唐津」¹⁰で知られる萩、唐津、遠州七窯¹¹のひとつである高取をはじめ、それぞれの地域で特色を持った焼き物が多く作られるようになっていったのです。その間、茶室も光の取り入れ方や広さにおいて、それぞれの茶人好みの茶室が作られ、そのいくつかは現在まで伝えられています。

ここでは茶室、茶道具に関する本を紹介します。

<主要資料リスト及び補足>

題名	著者	出版社	出版年
『茶陶の美 1 茶陶の創成 唐物から和物へ』		淡交社	2004
『唐物茶碗と高麗茶碗』	小田栄一／著	河原書店	1993
『現代の千家十職』	永楽善五郎／[ほか] 著	淡交社	1986
『千家十職 手業の小宇宙』	永楽善五郎／[ほか] 著	世界文化社	2012
『漆の美中村宗哲家の歴代』	中村宗哲／[編]著	淡交社	2003
『茶道具鑑賞便利帳』	黒田宗光／著	淡交社	2004
『山上宗二記入門』	神津朝夫／著	角川学芸出版	2007
※『山上宗二記』は、利休の弟子である山上宗二の秘伝書ですが、内容は茶道具の名物記としての要素が強くなっています。			
『日本美術全集 20 茶の美術 -茶器と茶室-』		学研	1999
『すぐわかる茶室の見かた』	前久夫／著	東京美術	2011
『近代の茶室と数寄屋』	桐浴邦夫／著	淡交社	2004
『茶掛を読む 1～4』		講談社	1997

エピローグ ～語りつくせぬ茶の湯のすべて～

代表的な茶人を中心に茶の湯の歴史を紐解いてみましたが、これで茶の湯の歴史のすべてを把握できたわけではありません。他にも知っておくべき茶の湯の歴史はありますし、茶の湯の歴史を語る上で当然のように触れておかなければならない茶人もいます。また、図書

¹⁰ 一楽二萩三唐津：茶の湯において、特に上位に格付けされた三つの器を称した表現です。「一井戸二楽三唐津」という説もあります。

¹¹ 遠州七窯：小堀遠州が指導し、好みの茶器を作らせたと言われる7つの窯元のことで、田内梅軒著『陶器考』によれば、志戸呂（静岡）、膳所（滋賀）、朝日（京都）、赤膚（奈良）、古曾部（大阪）、上野（福岡）、高取（福岡）が該当しますが、朝日、古曾部、赤膚は遠州没後に活動を開始していることから、異説もあります。

館の資料には、歴史や道具以外の資料も多数所蔵しています。最後に、ここまでの枠組みの中で紹介しきれなかった本を一挙に紹介していきます。

① 茶の湯の歴史、茶人の本

まずは、茶の湯の歴史を通して説明した本、ここまでに紹介しきれなかった代表的な茶人を紹介した本を集めました。利休七哲¹²をはじめとした、茶の湯に大きな足跡を残した茶人たちをここで紹介していきます。

<主要資料リスト>

題名	著者	出版社	出版年
『よくわかる茶道の歴史』	谷端昭夫／著	淡交社	2007
『茶道の歴史』	桑田忠親／[著]	講談社	1979
『茶道と天下統一 ニッポンの政治文化と「茶の湯」』	H・プルチョウ／著 篠田綾子／訳	日本経済新聞出版社	2010
『茶の湯事件簿』	火坂雅志／著	淡交社	2004
『細川三斎』	矢部誠一郎／著	淡交社	2003
『図解茶の湯人物案内』	八尾嘉男／著	淡交社	2013
『茶の湯連翹抄』	戸田勝久／著	思文閣出版	2005

② 茶の湯の作法を知る本、ハンドブック

図書館で所蔵している茶の湯の資料は、歴史や道具鑑賞のためだけの物とは限りません。ここでは作法を学ぼうという役に立つ資料や、全てを俯瞰したハンドブックを紹介していきます。

<主要資料リスト>

題名	著者	出版社	出版年
『<図解>「茶の湯」入門』	原宗啓／著	PHP 研究所	2004
『茶道ハンドブック』	田中仙翁／著	三省堂	2007
『必携茶の湯ハンドブック』	辻宗龍／編	里文出版	2009
『お茶のお稽古茶道入門』	松井宗幸／監修	成美堂出版	2003
『茶の湯の不思議』	小堀宗実／著	日本放送出版協会	2003
『茶の湯入門』（和楽ムック）		小学館	2012

¹² 利休の代表的な弟子七人のことで、江岑宗左著『江岑夏書』においては、蒲生氏郷、細川忠興、古田織部、牧村兵部、高山右近、芝山監物、瀬田掃部が挙げられています。諸説ありますが、蒲生氏郷、細川忠興はどの説にも挙げられています。

③ 小説に書かれた茶道、茶人

最後は図書館らしく、茶道や茶人を描いた文学作品を紹介して終わりとします。文学に描かれた茶の湯、茶人の世界をぜひご堪能ください。

<主要資料リスト>

(茶人の評伝小説)

題名	著者	出版社	出版年
『利休切腹』	関口多景士／著	近代文芸社	1996
『真説松平不昧』	長尾遼／著	原書房	2001
『化天 小説最後の武士・井伊直弼』	竜道真一／著	広済堂出版	2004
『秀吉と利休』	野上弥生子／著	新潮社	1990
『千利休とその妻たち 上・下』	三浦綾子／著	新潮社	1988

(評伝以外の茶の湯を扱った小説)

題名	著者	出版社	出版年
『雨にもまけず粗茶一服』	松村栄子／著	マガジンハウス	2004
『利休の茶杓』	山本兼一／著	文藝春秋	2014
『卒業 雪月花殺人ゲーム』 (講談社文庫)	東野圭吾／著	講談社	1989

今回このリストで紹介したのは、展示している資料のほんの一部です。他の展示資料も是非ご覧ください。貸出中になっている本は予約ができます。案内カウンターで手続きしてください。

平成 2 9 年 5 月 発行
さいたま市立桜図書館
さいたま市桜区道場 4 - 3 - 1
0 4 8 - 8 5 8 - 9 0 9 0
<http://www.lib.city.saitama.jp/>